書式７

助成番号	２１－ Ａ０６

成 果 報 告 書

記入日　2024 年　1 月　25 日

フリガナ：（　　コヤマ　ユミ　　） 氏　　名：　　小山　　祐実	渡航先国名 カメルーン共和国	留学先の所属機関：ヤウンデ第一大学 帰国後の所属機関：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻

研究テーマ：
カメルーン熱帯林に住むバカ社会の変化と女性の地位の変遷 ―ミクロな日常的事象の分析から―

研究期間　：　2022 年 8 月 ～ 2023 年 5 月, 2023 年 8 月 ～ 2023 年 11 月
（　1 年　2 ヶ月　）

研究成果（概要）：

社会のなかで、女性はしばしば周縁的な地位に置かれており、狩猟採集民バカの家庭においても、女性の実労働時間は長く負担は大きい。ところが、集団全体でみられる、多様な個人を認める考え方がジェンダーの固定化を妨げ、女性が行動や選択の自由を奪われることなく生き生きと世帯を支えている。

研究成果（詳細）：

本研究の目的はカメルーン東南部に住む狩猟採集民バカ・ピグミー（以下バカ）の集団において、既婚女性に焦点を当て、夫婦の関係性がどのように変化・再創造されているのか日常実践から明らかにすることである。バカはコンゴ盆地西部の熱帯雨林で狩猟と採集を行う人々であり、彼らの社会はリーダーを持たず、食物分配を通して富と権力の蓄積を排除する平等主義社会を特徴とする。しかしながら、1 世紀以上にわたり政府による定住・農耕化、森林開発、自然保護など影響をバカは継続的に受けている。その結果、生業・居住範囲は制限され、外部社会や近隣に住む農耕民との関係において社会格差が広がり、男女の役割にも変化を与えていると考えられる。そこで本研究では先行研究で十分にまとめられてこなかった日常生活における男女の関係性を分析し、バカの女性が家庭においてどのように位置付けられているのか、複数のグループを比較しながら検討した。

調査の概容

本報告書のデータ収集は 2022 年 8 月～2023 年 5 月、2023 年 8 月～11 月、合計 14 か月を通して行われた。調査は生業における農耕活動の割合や定住化の程度の違う 4 つのグループを対象にした。いずれも近隣に住む農耕民との接触や娯楽の機会が多くなる道路からの距離が異なり、遠い順からグループ 1～4 とした(表２)。またグループ 2 は調査の途中でキャンプ地を移ったため、それぞれグループ 2-1, グループ 2-2 と表記した。1 25 組の夫婦及び 7 名の寡夫・寡婦（表 1）を対象に、一定時間ごとに活動内容を記録するタイムサンプリングを用いて、夫婦の生活に密着した。また男性側の活動も同様に把握するため、グループ 1,2 に対し、現地アシスタントと夫婦同時に生活時間調査を行った。活動内容の仕分けには次のカテゴリーを設けた：〔Ⅰ主生業、Ⅱ副次的生業、Ⅲ家庭関連活動、Ⅳ娯楽・個人的活動、Ⅴ社会的活動〕。2 夫婦が一日にどのくらい一緒にいるのか把握するため、4 つの個体間距離（IIDs:Inter-Individual Distances）の範囲を設け（表 3)、それに従って滞在時間と範囲の測定を行った。3 加えて、観察によるデータを補うため、男女 40 名に生業と結婚に関するインタビューを実施した。

表 1. 調査対象者の人数及び年代と性別　※( )内はインタビュー実施人数

人数	性別	合計	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代
グループ 1	男性	5(1)		2(0)		2(1)		1(0)
	女性	5(3)		2(1)	2(1)		1(1)	
グループ 2	男性	14(5)	2(0)	3(0)	3(1)	2(1)	3(2)	1(1)
	女性	14(12)	2(2)	2(1)	3(4)	3(1)	2(2)	2(2)
グループ 3	男性	4(0)			1(0)	2(0)	1(0)	
	女性	2(0)			1(0)		1(0)	
グループ 4	男性	5(9)	2(1)	2(4)		1(1)	0(2)	0(1)
	女性	6(10)	2(3)	1(2)	1(2)	1(1)	0(1)	0(1)
全体		55(40)	8(6)	13(8)	11(8)	11(5)	8(8)	4(5)

←タイムサンプリングデータなし

表 2. 各グループの居住地と道路からの距離

地図上での直線距離		所要時間
グループ 1	1800m	20 分
グループ 2-1	1300m	15 分
グループ 2-2	100m	2 分
グループ 3	150m	3 分
グループ 4	0m	0 分

表 3. 個体間距離の範囲

範囲 1	目視でき且つ 1.5ḿ 以内
範囲 2	普通の声で会話が出来る
範囲 3	大きな声で会話が出来る
範囲 4	見えない、互いの声が届かない

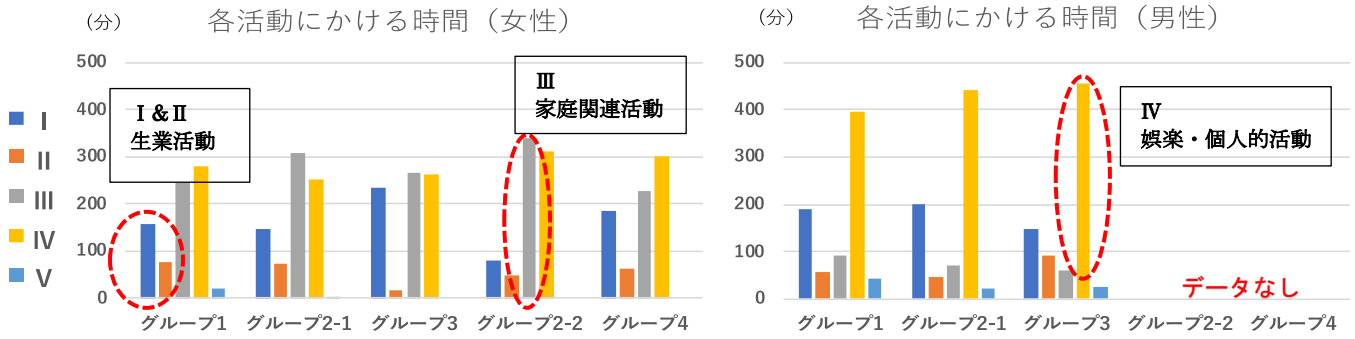
調査結果

1　生活時間調査　―明確な性的分業―

合計 55 日間（715 時間）、女性 27 名、男性 23 名に対し、観察時間 6:00～19:00 のあいだ 5 分毎に調査対象者の活動内容・活動場所・一緒にいた人物を詳細に記録した。グラフ 1 は男女がどの活動にどれほど時間を配分しているのかキャンプごとの平均を示したものである。

グラフ 1 からは、**全体を通して男女ともに生業活動（Ⅰ主生業、Ⅱ副次的生業）に同程度の時間をかけている**。グループ 3 のように高齢または病気で活動できない男性がいるところでは女性が主に生計を支えていた。**一方居住地では、女性はⅢ家庭関連活動に、男性はⅣ娯楽・個人的な活動に多くの時間を割いていた**。また男性は親戚や友人のキャンプの訪問、森林産物等の交換・販売といったⅤ社会的活動を行っており、バカが父系性であること、行動範囲が広いため物々交換の機会が多いことが関係している。次に、キャンプどうしの比較では、目立った違いはみられない。グループ 2-2 の女性が生業活動に従事する時間が少ないのは、データ収集が野外活動の制限される大雨季にあたり、女性はキャンプで過ごし、狩猟に適した時期であるため、男性は泊りがけで猟に出かけて、家を不在にすることが度々あった。

グラフ 1.　男女で時間の使い方の違い　※右に行くにつれ道路に近づく



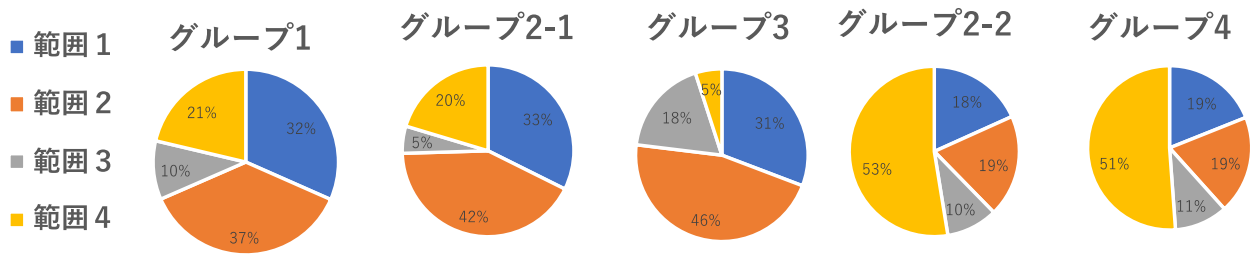
2　個体間距離の測定　―長時間短距離で過ごす―

1の調査と並行して、同じ調査対象者へ各調査日 13 時間のあいだ滞在時間と範囲を測定し、グラフ 2 に各グループの結果を示した。グループ 1,2-1,3 をみると、一日の大半を範囲 1 か 2、つまり**夫婦は相手がどこにいるかすぐにわかる場所で過ごしている**ことが分かった。これは観察時間のうち 73.3%、およそ 570 分に及び、日没後に活動を休止し家の中で過ごす 19:00 以降の滞在時間も入れるとさらに長くなる。

対照的に**居住地が幹線道路に近いところでは、夫婦が近くで過ごす時間は著しく減少**している。グループ 2-2 と 4 では観察時間のうち 51.9%（約 405 分間）、夫婦は範囲 4（声の届かない場所）で別行動していた。そのほとんどの場合、家事全般の責任を負う女性らが家に残り、自由時間が多い男性たちはキャンプを不在にしている。道路付近では、近隣に住む農耕民の所有する様々な製品、酒、たばこへのアクセスが容易であり、人口の多い定住集落では、親戚や知り合いに容易に会いに行くことができる。

以上のことから、先に述べた「長時間短距離」の滞在は、道路から離れて住み、定住度合いが低いバカの夫婦に見られる。反対に、定住化の進んだバカの夫婦は日中の滞在時間が減少し、それぞれ 1 日の半分以上を同性のグループと過ごす。

グラフ 2.　夫婦の滞在時間と範囲　※右に行くにつれ道路に近づく



3　ジェンダーと結婚に関する聞き取り

1及び2の記録観察による結果をより正確に理解するため、成人した男女 40 名（女性 25 人、男性 15 人）に性的分業と夫婦生活やジェンダーに関するインタビューを行った。

インタビュー調査からは**バカ社会全体を反映した人々の考え方**が垣間見えた。ここに全ての回答を載せることはできないが、調査対象者のなかで特に印象深い回答をした K 氏のことばを紹介する。「キャンプには良い人も悪い人もいる。それも含めて一緒に生きることが重要である」。つまり、男女ともに固定化されたジェンダー像、夫婦のあり方、社会が求める人物・性格が不在だった。一方で、例えば良い妻とは何かという質問に対し、バカ社会に特徴的な食物分配に関連する回答（人々に食べ物を分け与える）のみが人格的な描写としてなされ、各個人の性格の違いを認め、共生していくことに重きを置いている。

考察・まとめ

本研究の目的は、夫婦の日常生活の分析から、バカの女性が家庭においてどのように位置付けられているのか検討することであった。調査1～3の結果から、女性は特に家事に従事する時間が非常に長く、労働負担は大きい。しかしながら、聞き取りからは、男性が女性の能力や仕事量に言及し、ここ数十年では必要に応じて家事をするようになっており、流動的な性的分業が垣間見えた。また、生物学的な性に基づく役割は存在しているが、どちらかの性の優劣や特権を認めず、自由なジェンダー観によって、夫婦のパワーバランス、そして生活をともにするグループの調和が保たれているのではないだろうか。

留学中の生活・研究でのトピックス：熱帯雨林は暑くない？！

アフリカに行くと言うとみなサバンナのような乾燥した大地を思い浮かべ、またジャングルと聞けば鬱蒼とした森がサウナのように蒸し暑いと思い込んで、「そんな過酷なところに行くのか」と心配してくれる。ナショジオの表紙とジャングル大帝の見過ぎだと思う。少なくとも私の周りの人間はそうだ。

ケッペンの気候区分によれば、熱帯は一年を通して高温多湿（最寒月平均気温が 18°C 以上）であり、また年間降水量が 1500~2000 ㎜に達し、最少雨月降水量が 60㎜ 以上の地域を指すことが多い。これだけ聞くとかなり暖かい印象を受ける。そもそも熱帯という名前や説明がなんだかアツアツを想像させる。寒さに滅法弱い私には、むしろそれでもよかった。確かによく晴れた日に木陰もないような開かれたところにずっと立っていると汗がドバドバ出てきて、日差しは痛いほどだ。ところが森で野外生活をしているとどうだろう。昼間でも、森に入れば生い茂った草木が太陽を遮り、すっきりした風に吹かれ、いつでもひんやりした地面に腰を下ろせば、すぐにクールダウンできる。逆に言えば、陽もなく動いていない時の体感温度は低くなる。特に雨季は大敵だ。雨なのか、汗なのか、朝露のせいなのか何日も衣服が乾かないことはよくある。豪雨になると、あちらの赤土は保水機能が低いため地表部分に水がたまり、じわじわとテント内を水浸しにする。また葉で葺かれた伝統的な家（モングル）や土壁づくりの家屋は日よけに最適だが、隙間風を防ぐことはない。雨に降られ外に出られず、濡れた服のままじっとしていると、連日の疲労なども重なって震えることすらあった。

安定陸塊とか古期造山帯と呼ばれるアフリカ大陸では、地震災害はほとんどない。耐震構造が不要になるだけで。こうも簡単に家づくりが出来るのかと驚く。バカの女性が作るモングルは数時間、時には数十分で完成してしまう。けれども家を建てるとき、防寒のための密閉性や断熱性は、あまり考慮に入っていない。寒ければどこからか薪を見つけてきて、火を起こして、おしゃべりをしながら、大人も子供もみんなでくっついて、温め合えばよいのだから。きっと日本の「家は」暖かいのだろう。

終わりに、もしもアフリカの熱帯雨林に行って野営するようなことがあれば、速乾性のある長袖長ズボンとそれにダウンジャケットをチャック付きの袋に入れて持って行くことをおすすめする。

今後の社会貢献

1. 研究成果の発表・アウトリーチ

本プログラムで得られた調査結果は 2024 年 3 月 27 日、28 日に行われる「生態人類学会　第 29 回研究大会」および、5 月 18 日、19 日開催の「日本アフリカ学会　第 61 回学術大会」にて口頭発表を行う。その後、論文の執筆を進め、2024 年 8 月を目処に狩猟採集民研究を扱う国際ジャーナル「Hunter Gatherer Research」に投稿論文を寄稿する。

2. 今後の研究内容

主にタイムサンプリングで収集した様々な情報の分析を進め、多面的にバカの夫婦生活の考察を深める。また調査中、男女の食事の仕方の違いに興味を持ち、生活時間調査の傍ら、家庭で調理した食材の重さの測定、男女別に摂取した食事内容を同時に記録していた。これらは分析に時間を要し、また当初の研究計画にはなかったため、この報告書では記載することができなかった。従って、今後はこれらのデータから摂取カロリーを計算し、必要な摂取カロリーに対し、夫婦ともに十分な食事量と栄養を採れているのか、生態学的な観点から性差を明らかにし、男女の関係性について検討していく。

写真1

写真2